

るデータと指導経験の蓄積があるためそのまま行われている。

緑肥の導入と活用および土づくりは各地の農業試験場や農業協同組合によって繰り返し奨励されてきた。いくつかの地域と先進的な農業者はその実践によって地力の低下や病害を防止し、高品質な農産物の安定生産に結びつけてきた。

地力維持、土壌侵食の防止、有機栽培、新作物の導入などは、農業者にとって少なからぬ負担をもたらすことになるが、理解ある消費者と直接結びつくことによって、経営面での安定を得ることができると思う。

輪作へ緑肥を導入

北海道十勝地方士幌町では「士幌町緑肥推進協議会」を組織し、輪作体系内への緑肥導入を図ってきた。輪作の順番において根菜類（ビートとバレイショ）を続けて栽培しないように指導してきた。

小麦栽培後に野生エンバクの栽培と堆肥の投入を行うことにより土壌物理性（保水性・透水性・通気性）の改善、土壌団粒の安定度の改善、ネグサレセンチュウ密度の低減を実現することができた。

また窒素・リン酸・カリ肥料の減肥や作物病害の抑制が可能となった（田中正紳「士幌町における緑肥作物導入による

土づくり」土づくりにて農業 2015.2/3月号）。

樹園地では、園地の林床に牧草などを栽培する草生栽培が推奨されている。草生栽培は根が地中深く張ることにより土壌を膨軟にし、

①物理性の改善②保水性を良くする③土壌侵食の防止④有機物が土壌中に蓄積し肥沃度が高まる⑤硝酸塩などの水溶性の養分濃度抑制⑥土壌酸性化の抑制⑦雑草の抑制⑧害虫の天敵の住処となるため虫害抑制の効果、が知られている。

部分草生法も推奨

また果樹との養分と水分の競合が問題となる場合には、樹木の周辺の草を刈り取る「部分草生法」も推奨されている（小松正孝「樹園地の土壌管理における草生栽培法の効果と、センチピードグラスへの期待」土づくりとエコ農業 2015. 2/3月号）。

樹園地に限らず緑肥利用のさまざまな場面で、雑草抑制効果と地力増進効果が高いヘアリーベッチの利用も推奨されている（藤井義晴「ヘアリーベッチの緑肥効果と土づくりへの利用」土づくりとエコ農業 2015. 2/3月号）。

ただし、果樹の場合には窒素養分が過多になると果物の糖分や色付きなどの品質にとって好ましくないもので、イネ科草本の緑肥の方が好まれる。